

痴漢冤罪で婦警さんに
密室絶望取調べ！

ドS婦警さんの狙いは
もちろん男の急所！



玉子王子 著

1章 狡兎第三署は女性警官のみの警察署 国選弁護士も女性で地獄のハーレム

ずっと、目を引く男が前を通る。

なぜ目を引いたのか、稲垣は考える。

別に、大した理由ではなかった。自分と同じ服装だというだけだ。

同じ会社の同じ色のパーカーを着て、同じようにフードを被っている。

背丈も同じで、遠目には同じ人間に見えるだろう。

同じ大学生ぐらいの男かな、となんとなく思う。

それはどうでもいい話のはずだった。

売店で食事をしてから、店を出ようとする。

と、目を吊り上げた女が前に立つ。

黒いキャミソールのような服に、下はジーパン。

「なにか……おぐっ！」

膝。

女のジーパンに包まれた膝が、稲垣の太股の間に吸い込まれていた。

ゴチャ、と嫌な音がした気がした。

ゴリゴリ、と膝が動き、すでに根こそぎ気力体力が奪われるほどのダメージを受けた男の肉玉を転がし、磨り潰そうとする。

「な、なんで……」

「逃げようとするからだ。そうだろ？」

意味がわからない。

足を引かれると、その場で膝をつく。

周りがざわめく。

「まさか、昨日の……」

昨日、この駅の近くでレイプされた少女の遺体が発見された。

——ち、違う、俺は関係ない。あれは俺じゃない……

実際、稲垣には何の関係もなかった。

昨日の事件とは。

昨日というか、昨日発見された事件だが。

その事件の方は、犯人は稲垣ではない。

「皆さん、お騒がせしました。こいつは、昨日の事件とは関係ありません」

言いつつ、腕を掴む。

「さあ、署に来てもらうよ」

「ど、どういう……」

震えながら見る。

視界の端に、高校生ぐらいの少女が見えた。

「この人です！ 同じパーカーです！」

「わかってる。念のために見てもらっただけだ」

わけがわからない。

肉玉のあまりの痛みに、目が眩み、何も考えられなかった。

しかしなんとなく、感じるものはあった。

——痴漢の冤罪、って奴か？

それは恐怖だ。

人権だなんだと騒ぐゴロツキ連中にもそっぽを向かれる、引っ掛けられたら終わりの罨。

一度痴漢の冤罪をかけられれば逃げるすべはない。

ただ、稲垣がましなのは学生だということだ。

就職していれば、あっさり放り出されかねない。

いや、まだだ。

まだ有罪と決まったわけでもない。

思いながら、引っ張られる。

と、女が止まる。

「そういえば、あんた名前は？」

「稲垣です。おぐっ！」

平手。

自分の体を壁にして、周りのギャラリーには見えにくい形で稲垣の股間を掌で打ち、ギリギリと肉玉を握り潰しに掛かる。

身動きできず、爪先立ちになる稲垣。

喉の奥からうめきが洩れる。

周囲が急速に見えなくなり、目線が動かせなくなる。

握り潰される肉玉だけが世界のようにさえ感じられる。

「や、やめ……」

「稲垣、歩くの遅いよ」

「あ、歩くから放して……」

「そうやって素直にしてりゃいいんだよ。でも……」

耳元に、口を近づける女。

「やっぱり、痴漢なんて一回はキ〇タマ握り潰しておきたいけどね」

心底震える稲垣。

今の科学だと、玉が潰れても一日で治る。

それは希望でもあるが、恐怖でもあった。

治るのだから、と一部の女たちはかなり軽い理由で男の肉玉を破壊するようになった。

という話を、稲垣は何度も聞いていた。

まさか、と思っていた。

治るからと言って、易々と潰せるほど肉玉は軽くはないと。

だが、それはあくまでも男の感覚なのではないかと急に思えた。

今、ギリギリと握って来ている女の手には、手加減が感じられない。

女の力だから、「身動きできない」ですんでいるだけではないか。

彼女は本気で、睾丸を圧殺しようとしているのではないか。

急に、手が弛む。

大きく息をつく。

「あ、あの……婦警さん、ですよ？」

「そうだ。佐々木だ」

婦警。

なら、大丈夫だ。

——婦警さんなら、まさか本当に俺のキ○タマを潰そうとはしないだろう。

そうに違いない。

そうでないと困る。

「非番なのにご苦勞様です」

「いいさ。もうすぐ勤務に入るから、もう入る事にする」

駅の外に止まっていたミニパトから出てきた婦警と敬礼しあう佐々木。

警察署に入ると、稲垣は少し不思議に思った。

婦警とばかりすれ違うのだ。

まあ、そういうこともあるだろうと思う。

いくらか書類を書いた後、口の中の粘膜を採取する。

DNA検査を行うらしい。

性犯罪者なので過去に起きた未解決事件で採取されたDNAと一致するかもしれないということだ。

が、気が動転している上に肉玉にダメージを負っている稲垣はただなされるままで、何も考えられない。

取調室に入ると、私服のまま佐々木もついてくる。

知らない間にもう一人、こちらはちゃんと制服。優しそうで、少しほっとする稲垣。

「佐々木先輩、この人ですか？」

「そうだ、昨日の今日で痴漢とは」

「ち、違う！ 違うんですっ！」

ニコッと笑う後輩。

林というが、稲垣はもちろん知らない。

「どうぞ、とりあえずお座りください」

「え、あ、それじゃ」

引かれた椅子に座る。

座ろうとする。

と、椅子がさらに引かれ、床に尻から突っ込む。

「うっ！ な、なにを……おおおっ！」

軽く押すようにして、バランスの崩れた稲垣を仰向けに転がす。



軽く押すようにして、
バランスの崩れた稲垣を仰向けに転がす。
そして流れるような動きで、林は足を挙げる。
グニ、林の靴が稲垣の股間に押し付けられる。
「ちょ、なにを……」

「あ、ごめんなさい」
慌てた顔を見せる。
そして、全体重がかけられる。
「おおおおおおおおおおおっ！」
グリグリグリ、男の全てを否定するように
肉玉を踏みにじり、冷たい目で見下ろす林。
「うぎいいいっ！ や、やめ……」

「ごめんなさい！ 倒れそうだから助けようとしたら、
もつれて踏んでしまいました！」

グリグリグリ、肉玉に女の全体重がかかる。
もちろん耐えられる重さではない。
袋の中で滑り、逃げ回っているから
潰れていないだけだ。
僅かな不運で、
稲垣の男性器は踏み潰されていた。
いや、今だ、林はその「不運」を作り出そうと
爪先を僅かに上げ下げしながら、
足先だけの**去勢ダンス**を踊り続ける。

口では謝りながら、冷酷な目で見下ろしつつ。

そして流れるような動きで、林は足を挙げる。

グニ、林の靴が稲垣の股間に押し付けられる。

「ちょ、なにを……」

「あ、ごめんなさい」

慌てた顔を見せる。

そして、全体重がかけられる。

「おおおおおおおおおおおっ！」

グリグリグリ、男の全てを否定するように肉玉を踏みにじり、冷たい目で見下ろす林。

「うぎいいいっ！ や、やめ……」

「ごめんなさい！ 倒れそうだから助けようとしたら、もつれて踏んでしまいました！ 腐れキ○タマをね……」

グリグリグリ、肉玉に女の全体重がかかる。もちろん耐えられる重さではない。袋の中で滑り、逃げ回っているから潰れていないだけだ。

僅かな不運で、稲垣の男性器は踏み潰されていた。

いや、今だ、林はその「不運」を作り出そうと、爪先を僅かに上げ下げしながら、足先だけの去勢ダンスを踊り続ける。

口では謝りながら、冷酷な目で見下ろしつつ。

そして、小声で本音をボソリと漏らしながら。

のたうつ稲垣。

ふ、と微笑み、足を離す林。

「どうしたんです？ 苦しそうじゃないですか」

今気づいたように慌てて、上半身を抱き起こす。

ゼイゼイと息をつきながら、化け物でも見るような目で稲垣は林の優しそうな笑顔を見る。

手が、股間に伸びる。

「あら！ そういえば、その辺踏んじゃいましたね！ ごめんなさい、男の人の大事なところなのに！」

本当に心配しているような顔を見せながら、耳元に口を近づける。

「痴漢野郎なんて、タマタマ抜いて去勢すべきなのよ」

携帯の類はすべて没収され、録音などは不可能。

それでも、林は稲垣にしか聞こえない声を出す。

それは、稲垣にとってはいいことに思えた。

彼女が勝手にやっているだけで、周りの協力や応援はないことを示している、と考えられる。

と、林が笑う。

「あらああ、ちょっと安心した顔ですね？」

今度は、これ見よがしの大声だった。

「先輩、どう思います？」

「ああああ、ちよと安心した顔ですね？」
今度は、これ見よがしの大声だった。
「先輩、どう思います？」

「豚のオスは生後すぐ **睾丸を摘出する** そうだ」



「へえ！ 何ででしょうね？」
「キ〇タマぶら下げてたらメスに
余計な手出しをするからだろう」

「無理矢理しちゃうなんて酷いですねえ。
それを防ぐためなら、
タマタマとるぐらい仕方ないですよ」
「そうだ。キ〇タマ摘出で
去勢は止むなしだ」

急に、何の関係もないことを
話し出す二人。
しかし、その目は一瞬もそらさず、

ジッと **稲垣の股間を凝視** していた。



「豚のオスは生後すぐ睾丸を摘出するそうだ」

「へえ！ 何ででしょうね？」

「キ〇タマぶら下げてたらメスに余計な手出しをするからだろう」

「無理矢理しちゃうなんて酷いですねえ。それを防ぐためなら、タマタマとるぐらい仕方ないですよ」

「そうだ。キ〇タマ摘出で去勢は止むなしだ」

急に、何の関係もないことを話し出す二人。

しかし、その目は一瞬もそらさず、ジッと稲垣の股間を凝視していた。

——な、何だこの脅しは。男の股間見ながら豚の去勢の話しやがるなんて……

腹が締め付けられる。

肉玉が引き締まる。

と、佐々木が真顔をする。

「稲垣。私たちはお前に暴力を振るうわけにはいかない」

聞いて、耳を疑う。

今椅子から落とされ、股間を踏みにじられたばかりだ。

運がよかったので玉は潰れなかったが、悪ければそれまでだったろう。

いくらナノテクですぐ治るとはいえ、男にとって去勢ほどの恐怖はない。

潰れるかもしれない、潰れたかもしれない、そう思うだけで目の前が真っ暗になるほどの恐怖なのだ。

それをやられた所で「暴力を振るうわけにはいかない」など冗談ですらない。

「ああ、そろそろ立ったらどうだ？ 勝手に転んで、林ともつれて、少し踏まれたが、別に怪我はないだろう」

唇を噛む。

——そういう設定か。

強引だ。

だが、婦警二人が口裏を合わせればそれっきりだろう。

「弁護士を呼べ！ 呼ぶまで何も話さないぞ！」

「呼ぶ金があるのか？ 見た所学生だが」

「国の金で呼べるんだろ？」

「それなら、実はもう待機してもらってる」

不思議な話だ。

が、別に話が早い事に越したことはない。

内線電話で佐々木が何か言うと、すぐに弁護士が取調室にやってくる。

「内藤です、よろしく」

恰幅のいい女性弁護士だった。

助かった。

恰幅のよさ、熟女であること、それらがベテランで包容力がありそうに見えて、稲垣を僅かに和ませた。

やっと現れた味方。

それも弁護士だ。

その頼もしい味方が開口一番いう。

「痴漢したそうですね、稲垣さん」

「いや、冤罪なんだよ。何とか助けてください」

「それは難しいですね。証拠はあるんでしょ？」

「被害者の証言と、さっき監視カメラの捜査が終わったところですよ先生。今はいいソフトがあるから早い。DNAのほうももうすぐです」

「で、内容は？」

「顔はわかりにくいですが、服装は確実に稲垣です」

「なら、決まりですね」

呆然と聞きながら、稲垣はふと思い出す。

電車を降りるときに、同じ格好の男が出て行ったことを。

——あいつと、間違われてる？

「待ってくれ、同じ格好の奴がいたんだ。そいつが犯人だ！」

「往生際が悪いと損ですよ」

弁護士。

「罪を認めれば、痴漢の罰則は軽いんです。許せない話ですね」

思わず弁護士を見る。

その目は、汚物でも見るような目だった。

「え……あの……」

思わず弁護士を見る。

その目は、汚物でも見るような目だった。

「え……あの……」

「そういえば、この前の性犯罪の厳罰化を求める先生の講演会、聞かせていただきましたよ」

「あら嬉しい」

「私も先輩と一緒に。性犯罪の具体的な事例の話では気分が悪くなるほどでした」

「本当にもう、ああい連中は全員 **おチンチ○ちゃん切る** しかないわね」

「被害者に切らせて欲しいですね」

「知ってる？ おチンチ○の方がタマタマより再生が遅いのよ。三日はかかるんですって」

「ですってって、先生試したことありそう！」

「ちょっと、あるわけないでしょ！ してみたいけどね！」

笑いあう女三人。

その一人が、自分の味方などと、稲垣にはとても信じられなかった。

チウ、と女弁護士が稲垣を見る。

ス、と視線が下に行く。

——こんな痴漢野郎、**ペ○スを引っこ抜きゃいい**のよ。

そうすりゃ少しは思い込るわ。どうせすぐ生えるんだし。

女弁護士の考えは、もちろん稲垣にはわからない。
わからないが、なんとなく伝わるものはあった。

その弁護士にとって、「付いている」か「付いていない」か

が **何よりも重要** だという話が。



「そういえば、この前の性犯罪の厳罰化を求める先生の講演会、聞かせていただきましたよ」

「あら嬉しい」

「私も先輩と一緒に。性犯罪の具体的な事例の話では気分が悪くなるほどでした」

「本当にもう、ああい連中は全員おチンチ○ちゃん切るしかないわね」

「被害者に切らせて欲しいですね」

「知ってる？ おチンチ○の方がタマタマより再生が遅いのよ。三日はかかるんですって」

「ですってって、先生試したことありそう！」

「ちょっと、あるわけないでしょ！ してみたいけどね！ ペ○スちゃん切りは性犯罪と戦う女として一度はやってみたいわ！」

笑いあう女三人。

その一人が、自分の味方などと、稲垣にはとても信じられなかった。

チラ、と女弁護士が稲垣を見る。

ス、と目線が下に行く。

——こんな痴漢野郎、ペ〇スを引っこ抜きゃいいのよ。そうすりゃ少しは思い知るわ。どうせすぐ生えるんだし。

女弁護士の考えは、もちろん稲垣にはわからない。

わからないが、なんとなく伝わるものはあった。

その弁護士にとって、「付いている」か「付いていない」かが何よりも重要だということが。

しばらく談笑する三人。

と、急に思い出したように佐々木が稲垣を見る。

「それじゃ、取調べ再開だ」

「早く本当のことを言うのよ。あなたのために言ってるのよ？ だってね……」

またも、耳元で小声。

「この狡兎第三署では、性犯罪者の取調べ中の事故で……よく**睾丸が潰れる**のよ。二個とも、まあ治るからいいんだけどね。でも潰れたときの男の顔って……すごいよ？ これは何度か見たことあるの」

思わず、膝が締まる。

その姿を見て、弁護士の頬が弛むのを見て、どこにも味方がいないことを確信する稲垣。

恐怖で肉玉が縮む。

当然の反応だ。

しかし……

一物は、さほど縮んでいないことに彼はまだ気づいていなかった。

そして、この署の警官が女性だけだということにも。

彼に味方できる立場の男が、半径百メートルからの範囲内にただの一人もいない状況だという事に。

体験版終わり

更なる金責めCFNM地獄と、

冤罪が晴れた直後に過去の暴行事件がバレ、

金潰しを食らうという悲劇的な末路が稲垣を待ちます。

続きは製品版でお楽しみください